恋紅

皆川博子

新潮社

恋紅

皆川博子

新潮社

恋紅（こいべに）

昭和六十一年三月二十五日発行
昭和六十一年七月二十五日二刷
定価一一五〇円

著　者　皆川博子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　〇三―二六六―五一一一（業務）
〇三―二六六―五四一一（編集）
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
© 1986 by HIROKO MINAGAWA　Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-362001-3 C0093

恋紅

こいべに――目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

くるわ炎上……7
仮の宿……51
花の御霊……96
断弦……140
さくら舟……211

装幀　安西水丸

恋紅

くるわ炎上

十月の川風が八ツ口から胸もとにしのびこむ。冷やりと肌を撫でられ、ゆうは身をすくめた。

掛け小屋の呼び込み、覗きからくりの口上が、入り乱れてゆうの耳を襲う。夏場は大山参りの講中が水垢離をとるところから垢離場と呼ばれる東両国回向院前の広場は、冬のくもり空の下でも、見世物の掛け小屋、大道芸、おでこ芝居などに人が群らがっている。木でも金でも耳かきが一文、両国名物寄せ饅頭、こうばしい飴こうばしい飴と物売りが呼び歩く。

その猥雑な賑わいの底に、ひとすじ、琵琶の音を、ゆうは聴いた。

……能登の前司教経は矢だね尽き、いまは最期と思われければ……

この場所にそぐわぬ奥深い音色と、それにあわせて吟じる野太い声は、ゆうをぞくっとさせた。数えで九つのゆうは、水面にただよう芥屑の隙間から、永劫の闇のむこうの深淵を垣間見せられたような、そんな感覚を言葉で言いあらわすことはできなかったのだが。

連れのおふくの袂のはしを握り、爪先立ってのびあがってみたが、見えるのは行きかう人々の背と、その頭の上にのぞく目をそむけたくなるような絵看板ばかりであった。

……おのれら死出の山の供せよとて、生年二十六にてついに海へぞ入り給う。新中納言これを

見て……

ここもと御目に替わりますれば、と、近くの見世物小屋の口上がひときわ声をはりあげ、どこからきこえるとも知れぬ琵琶歌は、一瞬かき消された。これをお名残りに一切りの入れ替えとあいなりまする。先さまお代わりお代わり。散らし太鼓がひびく。その切れ間に、

今は見るべきことは見はてつ……

琵琶の弾吟がふたたび耳を打った。そのとき、

あれ、いやだよ、この子どこの子。

袖をつかんだ手を、邪慳に払われた。

そのまま立ち去ってゆく女のあとを追いかけて顔を見上げると、おふくではない。目晦ましにあったようで、ゆうは思わず立ちすくんだ。吉原から東両国までほぼ一里、連れがあれば、ゆうの足でも吉原まで歩いて帰れない道のりではないが、一人では心もとない。垢離場に着いてすぐ、おふくに餅を買ってもらって食べたけれど、そろそろ空腹になってきてもいる。

盛り場で迷子になると怖い男につかまって怖いところに売りとばされる、と耳にすることがあるのだが、その怖いところの一つに遊女屋もふくまれていると、ゆうはだれから教えられたともなく知っており、そのことを思いうかべるたびに何か奇妙な思いがする。ゆうの父は、吉原の半籬『笹屋』の楼主であった。

やてかんせ、やてかんせ、と大道に立って三味線を弾く女が、通行人に銭を投げろとせびっている。投げ銭を撥で受けとめるとき、大きく割れた裾がきわどく内股をのぞかせる。傾いた陽に糸のようにのびた女の影は、土にはりついて踊る。小屋にも大道にも、見る者と見られる者がいた。見られる者たちは、痛切な哀しみと見る者への憎しみを眼のうちにひそめているように、ゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うには感じられる。のど首だけ白く塗り、顔は陽灼けがしみついて渋紙色のやてかんせの女は、風に吹きさらされながら汗ばんでいた。

しょうことなしに、ゆうは歩きまわる。人の数が、見えない手で間引かれるように、少しずつ減ってゆく。あら、いたわしやな姉御さまは、つし王どのにすがりつき、と覗きからくりが拍子をとりながら口上をのべる声も嗄れてきている。客の入りが悪いのであきらめたのか、葭簀や垂れ筵をとりはずし、たたみはじめた小屋もある。

この日、ゆうは内所（楼主の家族の居室）にとじこもっていたところを、父に言いふくめられた通い髪結いのおふくに誘い出されたのだった。どこへ行くとも言わず、おふくはゆうを舟に乗せた。吉原通いの客がよく利用する船宿の舟であった。川下りは、いっとき、ゆうの気をまぎらわせはしたが、初めて連れてこられた垢離場の、そこに並ぶ見世物小屋の絵看板は、ゆうをいっそう淋しくさせるものばかりであった。

廓のなかに、河岸と呼ばれる怖ろしい場所があることをゆうが知ったのは、いつごろだったろうか。その名前だけは、物心つかぬうちから耳にしていたように思う。東西三町、南北二町、二万七百六十坪の吉原は、四方を板塀でかこわれ、その外を更に、幅約三間の下水堀、通称おはぐろどぶがとりかこむ。常の出入り口は北の大門ただ一つである。ほかに非常の際の出入り口が九箇所あるが、ふだんは刎ね橋をあげて通れないようにしてある。このおはぐろどぶに沿った塀を背に切見世の並ぶ一帯が、『河岸』であった。

浄念河岸とも呼ばれる西河岸の切見世は、掟にそむいたり楼主に迷惑をかけたりした遊女が懲罰として売られる場所なのだと、ゆうは薄々きいていた。そこは、ゆうが足を向けることを父に

厳しく禁じられた場所でもあった。

ゆうは、昨日、そこへ行ったのである。薄雲に会うためであった。

つい半年ほど前までは笹屋で全盛の花魁の一人だった薄雲は、上背があり、きりっとした顔立ちで、勝気で意地が強いが、ゆうにはやさしく、客からもらった菓子をわけてくれたり、暇なときは二階の座敷に呼び入れて、いっしょに手毬をついたり双六で遊んだりしてくれた。稼ぎのいい花魁は、座敷持ちといって、客の相手をする座敷と私室、二部屋を与えられる。薄雲の部屋は、金蒔絵の箪笥や長持などが飾られ、ゆうは、大名の奥方の部屋というのは、きっとこんなふうなのだろうと思っていた。その薄雲がふいに姿を消したのは、この春のことだった。身請けされたのだと母は言ったが、実は足抜けをしようとしてつかまり、西河岸に売られたのだと、下女が耳打ちしてゆうに教えた。

同じ日の昼、ゆうはもう一つ禁をおかし、父と母にきびしく叱責されている。昼見世がはじまる前であった。新造や禿たちが台所につづく板の間で朝とも昼ともつかぬおそい食事をとっている。そのとき、ゆうは禿のたよりが隅の方で、ひとり何も食べずにうつむいているのに気づいた。たよりはどうしたのかい、と訊くと、台の物に遣手より先に手をつけたので、叱られて、おまんま抜きなのだと、朋輩の禿が告げた。

七つ八つで買われてきて、花魁の身のまわりの用事をしながら、ゆくゆくは遊女として客をとるために必要なことを仕込まれる禿は、座敷に出るときはきれいな着物や花簪で飾りたてられるけれど、客の目のない陰では、何かというと罰を受け、食事を抜かれたり叩かれたりする。その泣き声は、しじゅう、ゆうの耳を刺す。

食事が終わった後で、ゆうはたよりをこっそり内所に呼び、菓子をわけてやった。そのために、

たよりはいっそうひどい罰を受けることになってしまった。もらった菓子を、たよりは無邪気に仲間にみせびらかし、そのことを遣手に告げ口されたのだ。物差で叩かれて泣き叫ぶたよりの声が、ゆうが慄えながらじっと坐っている内所にまできこえた。そうして、ゆうは、かってなことをしてはいけないと、父と母から厳しく叱責された。

二度とおせっかいなことをするんじゃないよ。甲高い母の声を背に聞きながら、ゆうは涙をにじませ、裏口から外に出た。まともに吹きつけてくる木枯しに、おはぐろどぶの饐えたにおいが混る。母の口叱言はしじゅうだが、父はいつも寛大だったので、その父に咎められたことも、ゆうを悲しくさせていた。薄雲に会いに行ってみようと、そのときふと思いついた。薄雲が足抜きをしたときいたとき、ゆうは、何だか裏切られたような淋しい気がしたものだけれど、姉さんにもきっと、たまらなくいやなことがあったのにちがいないと思えてきた。薄雲姉さんに話したら、お嬢さんは悪かァありいせんよと慰めてくれそうな気がする。

河岸までほんの二町（約二百メートル）足らずだが、はじめてのことなので、ずいぶん歩きでがあるように感じた。仲之町の通りも、人影はまだ少なく、馬糞まじりの埃を風がまきあげる。右に折れて京町一丁目に入ると、半籬や小見世は昼見世をはるころあいで、格子のむこうに、裲襠がゆらめいていた。客はほとんど通らない。廓のにぎわいは、陽が落ちるころからはじまる。

京町を通りぬけると、河岸に出る。間口四尺五寸、長屋作りの切見世が並ぶ前で、ゆうは足がすくんだ。客が通ったらひっぱりこもうと待ちかまえている女たちは、瘡だらけの鉛色の肌を濃い白粉で塗りつぶし、額がぬけあがった四十がらみのものまで混っている。着飾った花魁衆しか知らなかったゆうの目に、ここの女たちは、地獄絵からぬけ出してきたかのようにうつった。西北の烈風が、この場所ではことさら荒々しい。怖くなって帰ろうとしたとき、女の一人と眼があ

った。姉さん、と言いかけ、ゆうは口ごもった。薄雲は、死んだ魚のような目でゆうを見た。おずおずと近寄ろうとすると、「見世の前に立たないどくれ。邪魔だよ」とげとげしく薄雲は言った。

たった半年で、あたしの顔を忘れてしまったのだろうか。あたい、笹屋の……と言いかけるゆうに、薄雲は大またに見世の外に出てくると、どきなよ、と、いきなり馬糞をつかんで投げつけた。通りかかった遊び人風の男が、子供に何をするんだ、と咎めると、薄雲は手の汚れをはたき落とし、その男にしなだれかかった。汚ねえ、さわるな。いいじゃないか、ちょんの間、遊んでおいきな。わっちァ、もとをただせば、ごたいそうもない〝ありんす〟さ。松の位の太夫さまが、一切り百で遊んでやろうというのだ、ありがたく思いねえな。ほれ、息子が猛っているわな。男の前を握りしめ、口に吸いつき手足をからめ、二人で見世のなかにもつれこみ、戸が閉てられた。

板戸越しに、薄雲の笑い声がきこえる。やがて、男の声、そうして、荒い息づかいがきこえはじめる。男と女のことを、ゆうは知らないではなかった。見世の妓や使用人たちの話はあけすけだし、見世の者の溜り部屋にはあぶな絵が無造作に放り出してあり、内所の縁起棚には張子の男根がうやうやしく飾られている。居つづけの客が、妓たちといっしょに朝風呂に入り、高声で淫な話をかわす、その声はよくひびいて、ゆうの耳にもきこえてくる。しかし、妓が客と枕をかわす部屋は二階にあるので、なまなましい嬌声は、内所までとどくことはないのだった。そうして、父の佐兵衛は、ゆうの目や耳を、なるべく、そのことからそらせておきたがっていた。

薄雲と男のからみあった声は、ゆうの足を金縛りにした。

両隣りの見世の女たちが、薄笑いをうかべてゆうを見ているのに気づき、ゆうは走りだした。

笹屋に帰りつき、内所にこもった。そうして、今日になっても内所にひきこもったままのゆう

を、河岸に行ったことを知らない父の佐兵衛は、たよりのことで叱られたためにしおれていると思ったのだろう、気晴らしに遊びに連れ出すよう、おふくにたのんだのであった。

ふと、絵看板が目にとまった。他の小屋の、見るのが辛い因果物とちがい、それは芝居の場面を描いたものと思われた。三枚並んだ板絵のうちの一枚は、ゆうにも一目でわかる三人吉三であった。お坊吉三が振り下ろす刃を振袖のお嬢が身をそらせて小刀で受け、和尚吉三が留めに入る図柄は、豊国の芝居絵で見たことがある。それを模したのだろうが、彩色が剝げ、お嬢の顔は半ば板目があらわれていた。入口に立った幟は、額絵の薄汚なさとはちぐはぐに、浅葱や朱の色がまだ鮮やかだった。役者の名を染めぬいた文字は、読めないものもあったが、字面は目にのこる。富田角蔵丈江。富田福之助丈江、富田金太郎丈江。

打ち出しに近いのか、呼び込みも声をかけてこない。丸太を組み荒莚を垂らした小屋の入口には、大人八十四文、小人四十二文と木戸銭をしるした紙が、下の方はちぎれて、さがっている。ほかの見世物小屋は十八文からせいぜい三十二文、なかには只で入れて途中で投げ銭をねだるところもあるのだから、この小屋は垢離場でも格段に高いといえる。

高いにしろ安いにしろ、ゆうは鐚銭一枚持っていない。おふくがなかで芝居を見ているかもしれない。たしかめたいのだが入るわけにもいかず、小屋の横手にまわった。筵の破れたはしが風にめくれあがっていた。目をあててのぞいてみる。藁のささくれが頬を刺した。

屋根のない吹きさらしの桟敷に、客はまばらだった。桟敷といっても、丸太の根太に駄板を並べ荒筵を敷いただけだから、床下からも風が吹き上げるのだろう。びんの毛をなぶられ寒そうに背をこごめた客のなかに、おふくはいなかった。

暮れかかった外光をたよりの舞台は、井戸の底をのぞくように暗い。色彩を薄闇に吸いとられた舞台に、ゆうは目をこらした。

演じられているのは、絵看板にあげられた三人吉三ではないようだった。背景は遠見幕を一枚吊しただけで、その幕がときどき揺れるのは、裏の楽屋を通る人の軀が触れるためか、風のせいか。舞台の真中で、抜き身を下げた男が奴(やっこ)ふうの男を斬って捨てたところであった。もう一人、合羽菅笠の男が下手で様子をうかがう。

抜き身を下げた男が、

死霊のたたりと人ごろし、どうで逃れぬ天の網。しかし、いったん逃るるだけは。

と、下手に行きかけたとき、合羽菅笠をぬぎ捨てた男が、斬ってかかった。

民谷伊右衛門、ここ動くな。

や、われは与茂七。なんで身どもを。

女房お袖が義理ある姉、お岩が敵のその方ゆえ、この与茂七が助太刀して。

いらざることを。そこのけ佐藤。

民谷は身どもが。

立ちまわりがつづき、舞台の床板がぎしっと鳴った。薄どろとともに、焼酎火の人魂が浮かんだ。

伊右衛門の役者は、与茂七に斬りつけられると、

首がとんでも動いてみせるわ。

と大仰な見得をきった。『いろは仮名四谷怪談』の大詰めのようだと、ゆうにもわかった。しかし、〝首がとんでも〟のせりふは、隠亡堀の場で使われるはずだ。いいかげんに変えてあるら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com